# 歸台以後

## ―第一回村研大会に寄す―

高倉又二

村研大会から帰って既に二週間になるが、率直に言って、それが爾来の自分の研究生活態度に投じた波紋の拡がり並に深さの測定に苦しんでいる。その測定は第2回、第3回の大会と重ねてはじめて確認さるべき性質のものであろう。然し自分の気持が今、その第2回を今月に、第3回を来月にと叫び求めていることをはっきり告白せざるを得ない。

自分のこの今の心の昂ぶりの底には、この村研大会に結集されたような全国各地域の、諸々の学問領域に亘る百名に垂んとする村落研究者が、何の心配もなく、こうした運営討議を年にせめても六回もてたなら、其処からどんなに素晴しい業績が生み出され、日本農村近代化の導きのエネルギーに凝集することだろうかということの口惜しさが白々と流れている。勿論、単に大会の頻数化のみの中から成果の輝かさの保証を得ることは出来ないが、仮にここに年六回と言ったことは、大会実績における六名の発表者を念頭においての勘定である。即ち一名が午前中発表、午後同発表を問題提起とする理論的技術的諸討議と仮定する六日間の大会運営は、その実績的内容よりして決して空想領域に属するものではないと確信するからである。

即ち今次村研大会の具体的には一日打切りよりする〃口惜しさ〃の感情残滓は、〃村研〃構造並にその機能的な運営型態が具体的に、但し端緒的に示してくれた〃嬉しさ〃の感情の反映に外ならなかった。私は、ここで特に地方新制大学の研究体制の客観的諸條件の現状に言及しようとは思わない。又それにも不拘、地方新大に要請され来る農村問題対決の深刻なる現実性を証べる機会でもないと思う。ただ言い得ることは、そして言いたいことは、今の自分のこの口惜しさと嬉しさとのコンプレックスの現実的基盤をやはりはっきり指摘しておかねばならぬということ、そしてこの現実的基盤の打開前進のためには、どうしても村研大会において示された嬉しさの具体的構造が、それぞれの地域において組織的に具現されその地域々の重層的凝集の中に、謂はば、地域々における口惜しさの組織的凝集物のみが大会にてときほぐされて行ったなら大会はより豊かな成長のための堆積となるであろうということである。

かくて村研第一回大会の教訓は、村研大会の今後のよりよき発展のためには、地方組織の連関的な充実が土台とならねばならぬということのみでなく、地方の農村研究の打開的前進のためには、田畑の中から、鋤とるより素朴な、しかし同時に切実な態度を紐帯の基本線とした〃村研構造〃が結成されて行くことの中に求められるということこれであろう。（宮崎大学）